

# 2

RANKING

総論

日本・日本人の  
良さを  
指標から見る

## 日本の良さは今なお健在

「ギャランティード(約束されている、間違いがない)。

2020年の東京オリンピック・パラリンピックを日本にもたらしたのは、この言葉だ。2013年9月7日のIOC(国際オリンピック委員会)総会で、IOC理事である竹田恒和氏が使った。東京を開催地に選ばば、大会の成功は約束されたに等しい。竹田氏が力強くそう言ったとき、約100人からなるIOC委員たちの多くはうなずき、56年ぶりに東京で夏季五輪を開くことが決まった。

すごいことだ。バブルの崩壊から20余年、この間の日本経済は「失われた20年」と呼ばれてきた。けれども国際社会は日本の「約束」にうなずいてくれた。日本にまかせれば「間違いがない」。「失われた20年」を経た今もなお、そう思わせる何かは日本にはあるらしい。その「何か」を、ここでは「日本の良さ」と呼ぶ。

東京五輪開催が決まった直後、イギリス人ジャーナリストが書いている。「日

本の人は自分たちを世界の落ちこぼれのように感じているらしいが、それは自虐的すぎる。たしかに日本経済の苦境は続いているが、技術力は健在で、複雑で大規模なプロジェクトをやり遂げる能力はずばぬけている」と(『ニューズウィーク日本版』2013年9月24日号)。

### ——日本の「おもてなし」が注目

日本人よ、自信をなくすな。耳を澄ませば世界中からそんな声が聞こえてくる。今回の五輪招致では日本の「おもてなし」が注目された。2004年のノーベル平和賞受賞者ワンガリ・マータイ氏は、日本古来の「もったいない」精神を世界に推奨した。KAWAII(かわいい)はファッション界を中心に、今や世界に通用する日本語の1つだ。

このように見えてくると、日本の良さは今も健在で、世界はそこにあこがれ、期待している。問題は、どうやってその期待に応えるかだ。

## 好感度やソフトパワーで評価される日本

成長していたころを知らない、将来に希望をもてない世代からすれば、この国のどこに「良さ」があるのかと思うかもしれない。でも諸外国との比較で見ると、日本にはけっこう良い点があるようだ。まずは今の世界で、日本がどのように評価され、どのような分野で高位にランクされているかを探ってみよう。

最初に「国際競争力」について言えば、総合評価は60カ国・地域中の24位(IMD世界競争力年鑑2013年版)(#02-01)。決して高いとは言えない。ただしここでの競争力は主として「進出先を探す企業にとっての魅力度」を意味しているから、成熟国家で人口の増加(市場の拡大)を期待しにくく、言葉の壁もある日本には不利な指標とも言える。

逆に高い評価を得ているのは「好感度」。イギリスの公共放送局BBCが毎年発表している国際的な世論調査、「世界に良い影響を与えている国」ランキングで、日本は2012年に1位だった。2013

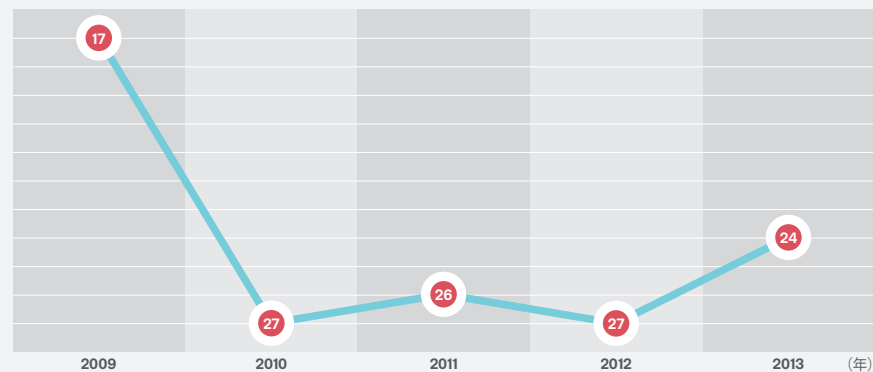
年は4位に終わったが、いずれにせよ高い評価を得ており、国内でもっと注目されてよい指標の1つだ(#02-02)。

国家の非軍事的な力量を総合的に判定する英誌『MONOCLE』の「ソフトパワー調査」でも5位。この調査はスポーツの競技人口や留学生数などの数値も組み入れ、政治、外交から文化や教育に至る50項目を指標としている。福島原発事故の影響もあって2012年には順位を下げたが、東京五輪誘致の成功や「アベノミクス」効果もあって2013年は復活のベスト5入りである。

また、森記念財団による「世界の都市総合力ランキング」(2013年)では、4位に東京、15位に大阪、28位に福岡と、上位30位に日本の3都市がランキングされている。イギリスの新聞「ガーディアン」が読者の満足度投票で選ぶ「ガーディアン・トラベル・アワード」(2013年)の「好きな外国の都市」でも、東京は1位を獲得している。

## #02-01 企業立地から見た国際評価は高いとは言えない

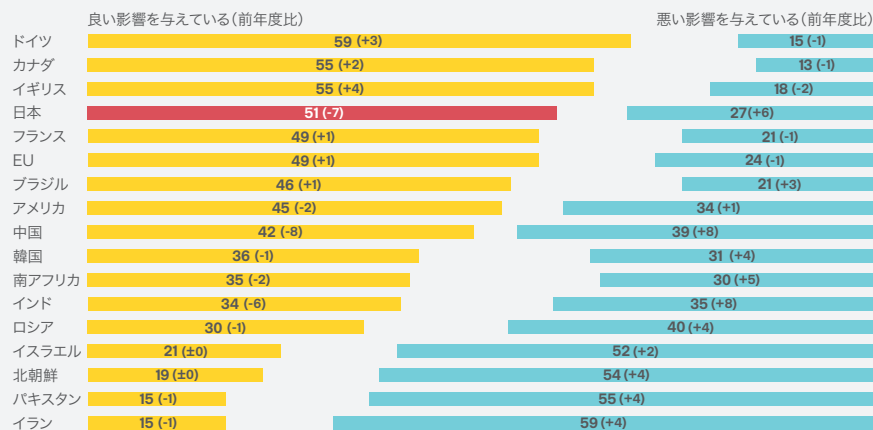
IMDの国際競争力調査(総合ランキング順位)



出所:IMD世界競争力年鑑2013年版

## #02-02 好感度は世界トップレベル

BBC:国別好感度ランキング(2012-13)



出所:BBC World Service

## 海外から見た評価と国内から見た評価

どうやら、外から見た評価(海外浸透度)と私たちの自己評価(国内認知度)の間にはギャップがあるようだ。海外で「日本の良さ」と認知されているのに、私たちに当たり前のことで、気づいていなかったもの。たとえばUMAMI(旨み)は甘味や酸味、塩味、苦味に次ぐ第5の味覚として、今や海外で認知されている。このようなものはほかにも多くあるのではないか。これらを再発見し、そこへ積極的に投資していけば、やがて強さとなり、新たな成長の道へとつながっていくのではないだろうか。

## 【科学技術の力】

24位だったIMDのランキングも、「科学インフラ」は2位の高評価。企業の社会的責任に対する経営者の自覚もトップにランクされる。言うまでもなく日本の自動車産業の競争力は健在だし、科学技術の分野でも世界をリードする。2000年以降の自然科学系のノーベル賞受賞者は7人と世界2位である。

## 【社会的安全性】

深夜の遅い時間に女性が1人で歩けるのも、電車で居眠りができるのも安全の高さゆえ。イギリスの「エコノミスト」紙の「世界平和度指数」(2013年)では、日本は162カ国中6位にランキングされている(#02-03)。

## 【システムの力】

「失われた20年」を経て、日本の産業力に対する海外の評価は高くない。しかし3分間隔で満員電車を走らせる鉄道の運行システムや、「カイゼン」に代表される地道な努力の積み重ねで生産性を向上させる産業の底力は健在だ。資源小国ゆえに積み重ねてきた努力で、日本は省エネ先進国にもなっている。ただし、この実績を海外にアピールする姿勢は不足していたのかもしれない。

## 【国民の健康】

個別の指標を見れば、平均寿命も健康寿命(介助を必要とせずに自立して暮らせる年齢)も世界のトップクラス。身体

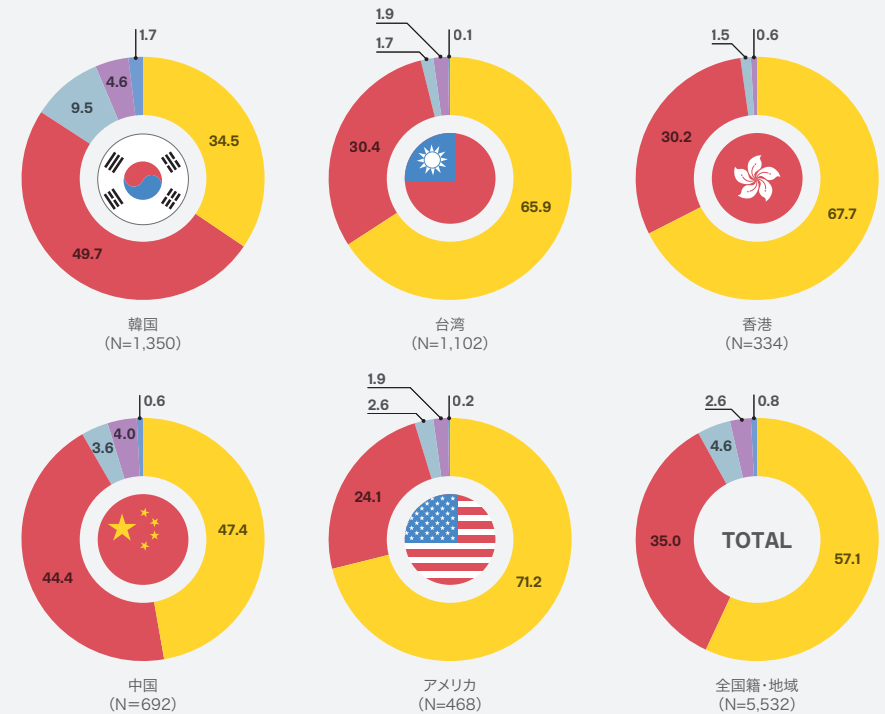
#02-03 日本は世界有数の安全な国  
世界平和度指数 (2013年版)

2013 順位	国名	点数	2012 順位	2011 順位
01	アイスランド	1,162	01	01
02	デンマーク	1,207	02	04
03	ニュージーランド	1,237	02	02
04	オーストリア	1,250	06	06
05	スイス	1,272	10	16
06	日本	1,293	05	03
07	フィンランド	1,297	09	07
08	カナダ	1,306	04	08
09	スウェーデン	1,319	14	13
10	ベルギー	1,339	11	14
11	ノルウェー	1,359	18	09
12	アイルランド	1,370	06	11
13	スロベニア	1,374	08	10
14	チェコ	1,404	13	05
15	ドイツ	1,431	15	15

※点数は24項目の指標から決められている。  
「対外戦、内戦の数」「政治的不安定さ」「殺人事件の数」など、少ないほうが平和度の評価が高まる項目で構成されている。  
出所: The Economist

#02-04 外国人観光客の多くが「また来たい」と思っている  
訪日旅行者の再訪意向 (主要国籍・地域別) (%)

● 必ず来たい ● 来たい ● やや来たい ● 何ともいえない ● 来たくない



※国内の各空港で聞き取り調査を実施。  
出所: 観光庁「訪日外国人の消費動向」2013年10-12月期報告書

にやさしい「和食」のおかげで肥満度も低い。寿命の長さは、少子高齢化・人口減への懸念と相殺されがちだし、問題視すべき点はあるが、もっと誇ってよい点だ。

### 【ソフトの力】

日本では「オタク文化」と揶揄されてきたマンガやアニメに目を向け、そこに独創的な「クールさ」を見出したのは欧米人たちだ。私たちがハンバーガー系のファストフードに慣れるのに対し、海外では寿司に代表される日本食への関心が高まった。その結果が「和食」の無形文化遺産登録だが、こうした外からの関心や期待に、私たちはまだ十分に応えていない。

### 【地域に眠る資源】

観光で来訪した外国人に「日本にまた来たいか」を聞くと、高い割合で再訪したいと言う（#02-04）。一方で実際に訪れている外国人観光客の数は初めて年間1,000万人を超えたに過ぎない。日本には世界に誇れる地域それぞれの文化や歴史などの資源があるのに、それを多くの人に楽しんでもらえていないことに

なる。2020年の東京五輪開催を機に、この状況を変えられるだろうか。

### ——成長産業へつなげる6つの分野

#02-05のとおり、海外・国内ともに認知度の高い自動車は日本経済の牽引力であり、今も輸出産業として高い競争力を維持している。逆に国内で認知度が低く、海外にも浸透していない分野（地域資源、健康など）については、国内外で「気づき」を高める努力を積み重ねていく必要がある、そこには新たな産業が開花する潜在力が秘められている。また国内外の認知度に高低差のある分野（鉄道や省エネ、コンテンツなど）は、そのギャップを埋めることで新たな成長産業を生み出せる可能性が高い。

本書では、そうした産業化の可能性を秘める分野のうち、とくに有望そうな6つの分野（鉄道、省エネ、健康、和食、コンテンツ、地域資源）について見ていきたい。

また、それらに共通する国民性や気質など、「日本の良さを生み出す源」についてもあぶり出していく。

## #02-05 新たな産業への可能性を秘めた6つの分野

本書が注目する有望分野の認知度マッピング

